か、一週間を細かく分けていた。これは漆の仕事をするのには非常に都合がよかった。午前中仕事して午後は塑造をやるとか、午前中塑造をやって午後は実習になる。塗っては乾く間、また向こうに行ってやるという融通がきいた。

古美研には全員が行った。半月位の予定で一般の人たちが入れないような所へ入れた。美術学校の生徒に特典があったように思う。その影響が卒業制作に現れて、当時の卒業制作は仏教美術工芸品が多かった。卒業制作のための資金が出て、漆は一番高くて八〇円、彫金が五〇円、その代わり制作したものが全部文庫の、つまり国の所蔵品になった。

⑩ 工芸済々会

工芸美術の振興を期して工芸済々会が組織された。大正十四年五月十六日下谷伊豫紋に於いて発会式を挙行。会員は、板谷波山、清水亀蔵、海野清、石田英一、六角紫水、沼田一雅、佐々木象堂、杉田禾堂、赤塚自得、香取秀眞、山本安曇、北原千祿、桂光春、峰岸寶光、堆朱楊成、植松包美の十六名であった。

同会第一回作品展は同年十一月十七日から二十一日まで、京橋の高島屋呉服店で開催された。『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第六号の「芸苑彙報」欄に記事が掲載されている。会員は工芸界の中堅、大家と目された人々であったから、各紙がこれを取り上げた。『東京日日新聞』（同年十一月十三日）は

帝展を向ふに工藝美術展覽會

濟々會半歳の苦闘　漸く十七日蓋あけの歡び

帝展に第四部工藝美術部の設置は黒田前美術院長の理想であつたがその死去によつて實現は望み少なくなつた　殊に福原新院長の帝展改革案は全然この問題に觸れようとはせず會員中にも帝展の工藝美術抱擁を喜ばぬものが多かつた、最早帝國美術院のたのむに足りぬことを知つた工藝美術家たちはいよいよ自らの力によつて起つことになり先づ斯界の第一人者板谷波山氏等の十六氏が結束して工藝濟々會なるものを起し花々しく打つて出たのは今春四月で美術界の新運動として注目されたが爾來半歳の苦心はいよいよ第一回の展覽會開催の運びにまで至り來る十七日からしかも帝展會期中力作を發表して工藝美術家の存在を世に問ふことになつた　出品すべて六十二點いづれも全力を傾けた大作である

と報じている。

大阪の工芸雑誌『汎工芸』主幹の柴崎風岬は工芸済々会を次のように位置づける。

此會は最初から作品の發表による作家の團體であつて、外に深い意味はなかつたのである。それが存續されてゐる爲、今日四部〔帝展第四部〕の實現によつて、いつしか帝展と結ぶやうに進み、今殆んど同會の會員は、帝展第四部に於て勢力を得てゐるやうである。

或は、赤塚〔自得〕氏あたりは、前の日本工藝協會が自然消滅の憂き目を見たゝめ、此の工藝濟々會をもつて社會的に工藝の擡頭をはかり、一つには帝展の四部設置へと工藝家の働きを強くせ

ん爲と考へてゐたかも知れないが、同會としては、何等斯かる聲名の發表をしたものではない。だから、第三者の立場にあるものは、單なる作品發表による一つの作家の團體であると見たであらう。現在もさう見てゐるものが多いではないか、最近も、時々東京及び大阪で展覽會を催して居るが、その實際から眺めて、ほとんど、作品賣立てといつた一般の工藝家の展覽會と選ぶところはない、而かも工藝濟々會の名として餘りに振つてゐないやうである。

（柴崎風岬『官展工芸側面史』昭和二十五年、汎工芸社）

なお、津田信夫を中心とする新傾向の作家は別途の道を歩もうとした。『鋳金近代史稿』（嶋本久寿弥太編著、鋳金家協会発行、昭和三十二年）工芸済々会の項にその間の事情が次のように記されている。

津田信夫はフランスから帰国後、新感覚の作品を発表して当時注目されたもので、工芸済々会も加入をすすめたが応ぜず、新傾向の作家をあつめて近代工芸美術の発端とも言うべき工芸運動の胎動をもたらした。そのため、杉田禾堂は途中で済々会を退会、済々会は伝統的技術に徹した作家を中心として、昭和十一年新作品展、十二年十月第十回展と昭和十三年頃まで盛んに活躍した。